柏 谷 家 文 書

（採訪時住所　山口県大津郡日置村黄波戸）

目録番号			年号	西暦	干支	閏	月	日	標題	作成	宛名	形態	数量	備考	整理番号		
1			明治 4	1871			1		仕切算用帳	住吉丸　幾太郎		横帳	1		2		
2			明治 6	1873	酉	閏	12		地下合銀人別払渡帳	上野作兵衛拵之		横帳	1		15		
3			明治 7	1874	戌				明治七戌暮諸払控帳	柏谷太三郎拵之		横帳	1		19		
4			明治 9	1876			12		子ノ暮諸払控	鯨会社		横帳	1		20		
5			明治 9	1876	子		1		鯨金取縮帳	黄波戸浦　鯨方会社		横帳	1		3		
6			明治 9	1876		旧	3		明治九年組揚舟用帳　組方之分	鯨方会社		横帳	1		4		
7			明治 9	1876			12		諸運上金取縮帳	柏谷太三郎拵之		横帳	1		5		
8			明治 9	1876	子		9		組立中諸入目仕出長（明治9年9月～同10年4月）	鯨方会社		横帳	1		6		
9			明治 9	1876	子		3		組建中諸入費払出帳	鯨方会社		横帳	1		7		
10			明治10	1877	丑		1		諸算用控帳	柏谷太良兵衛		横帳	1	1の59丁目と60丁目の間に10-1が挟みこまれていた	1		
10	1								記（米代等60円預りにつき）	庄太郎	柏谷様	切紙	1		1	1	

目録番号			年号	西暦	干支	閏	月	日	標題	作成	宛名	形態	数量	備考	整理番号		
11	1		明治11	1878		旧	12	18	戸崎網代ニテ野曾鯨拾三尋もの壱本取留建物代金払帳			横帳	1	11-1～11-7の横帳7冊は、綴じ紐で綴じられている	33	1	
11	2		明治11	1878		旧	12	27	戸崎網代ニテ野曾鯨拾弐尋もの壱本取留建物代金払帳			横帳	1	11-1～11-7の横帳7冊は、綴じ紐で綴じられている	33	2	
11	3		明治12	1879		旧	1	5	戸崎網代ニテ野曾鯨拾弐尋もの壱本取留建物代金払帳			横帳	1	11-1～11-7の横帳7冊は、綴じ紐で綴じられている	33	3	
11	4		明治12	1879		旧	1	22	戸崎網代ニテ青嶋鯨壱本取留建物代金払帳			横帳	1	11-1～11-7の横帳7冊は、綴じ紐で綴じられている	33	4	
11	5		明治12	1879		旧	1	29	戸崎網代ニテ座頭鯨大九尋もの弐本取留建物代金払帳			横帳	1	11-1～11-7の横帳7冊は、綴じ紐で綴じられている	33	5	
11	6		明治12	1879		旧	2	25	戸崎網代ニテ座頭鯨三本取留建物代金払帳			横帳	1	11-1～11-7の横帳7冊は、綴じ紐で綴じられている	33	6	
11	7		明治12	1879		旧	3	10	取詰出情帳			横帳	1	11-1～11-7の横帳7冊は、綴じ紐で綴じられている	33	7	
12	1		明治11	1878		旧	12	18	戸崎網代ニテ野曾鯨拾三尋もの壱本取留勝負出情帳			横帳	1	12-1～12-6は綴じ紐で綴じられている	34	1	
12	2		明治11	1878		旧	12	27	戸崎網代ニテ野曾鯨拾弐尋もの壱本取留勝負出情帳			横帳	1	12-1～12-6は綴じ紐で綴じられている	34	2	
12	3		明治12	1879		旧	1	5	戸崎網代ニテ野曾拾弐尋もの勝負出情帳			横帳	1	12-1～12-6は綴じ紐で綴じられている	34	3	
12	4		明治12	1879			1	22	戸崎網代ニテ取留メ青鷺鯨勝負出情帳			横帳	1	12-1～12-6は綴じ紐で綴じられている	34	4	

目録番号			年号	西暦	干支	閏	月	日	標題	作成	宛名	形態	数量	備考	整理番号		
12	5		明治12	1879		旧	1	29	戸崎網代ニテ座頭鯨大九尋弐本取留勝負出情帳			横帳	1	12-1～12-6は綴じ紐で綴じられている	34	5	
12	6		明治12	1879		旧	2	25	戸崎網代ニテ座頭鯨三本取留勝負出情金払渡帳			横帳	1	12-1～12-6は綴じ紐で綴じられている	34	6	
13			明治11	1878			12	18	日雇控帳	鯨方会社		横帳	1	標題が×字で消されている	35		
14			明治12	1879	卯		7		運上金取縮帳	浦役人　柏谷太兵衛		横帳	1		31		
15			明治13	1880			11		鯨売捌代金仕詰帳	捕鯨会社		横帳	1		32		
16			明治13	1880			7	13	運上金改定簿			横帳	1		30		
17			明治13	1880			1	29	明治十三年　正月二十九日取青鷺鯨壱本配当会社控帳			横帳	1		36		
18	1		明治14	1881		閏	11	11	戸崎新網代ニテ長曾鯨拾六尋物取留立物払渡帳	会社㊞		横帳	1	18-1～18-4は綴じ紐で綴じられている	37	1	
18	2		明治14	1881			11	29	戸崎網代ニテ野曾鯨拾三尋物取留立物代金払帳			横帳	1	18-1～18-4は綴じ紐で綴じられている	37	2	
18	3		明治15	1882			1	1	戸崎網代ニテ白野曾拾五尋物壱本立物代金払長			横帳	1	18-1～18-4は綴じ紐で綴じられている	37	3	
18	4		明治15	1882			1	12	戸崎網代ニテ野曾拾壱尋物壱本立物代金払長			横帳	1	18-1～18-4は綴じ紐で綴じられている	37	4	

目録番号			年号	西暦	干支	閏	月	日	標題	作成	宛名	形態	数量	備考	整理番号		
19			明治14	1881	巳		5	17	組建中諸仕入帳			横帳	1	交名書一丁挟み込み、「控長」と朱書	28		
20			明治14	1881			12	21	地下高年中諸入費帳	浦役場		横帳	1		29		
21			明治15	1882		旧	3		午ノ組揚賃金算用帳	捕鯨会社		横帳	1		9		
22			明治16	1883			11	7	明治十六年組建　組建ニ付人数入込控帳	捕鯨組		横帳	1		8		
23			明治16	1883	申		1	11	鯨売立控帳（正月から三月迄、鯨取留売立控帳）	会社		横帳	1		10		
24			明治16	1883					明治十六年組建　萬暫控日記　第弐号	会社		横帳	1		11		
25			明治16	1883					與良津暫控簿　第壱号	捕鯨組		横帳	1		13		
26			明治16	1883			10		明治十六年組建　薪竹明松買入	捕鯨組		横帳	1		16		
27			明治16	1883	未		11		組建中米買入仕出シ帳	捕鯨会社		横帳	1		18		
28			明治17	1884			5		組建中賃飯米払渡長	捕鯨会社　秋山徳兵衛		横帳	1	付箋が複数頁にあり	12		
29			明治17	1884			1	17	組建中諸払帳　并ニ請金控	会社		横帳	1		14		

目録番号			年号	西暦	干支	閏	月	日	標題	作成	宛名	形態	数量	備考	整理番号		
30			明治17	1884			4		組揚賃銭飯米払渡帳	黄波戸会社		横帳	1		17		
31			明治22	1889		閏	4		鰯網仕入網金請方控帳	柏谷幾太郎		横帳	1		21		
32			明治25	1892		閏	2		海苔嶋大敷縄買入控	柏谷		横帳	1		22		
33			明治40	1907		閏	4	19	重右衛門組合割帳			横帳	1		23		
34			明治40	1907		閏	4	19	重右衛門いわし浜売帳			横帳	1		24		
35			明治40	1907		閏	4	19	重右衛門組算用帳			横帳	1		25		
36									丑ノ暮合割長	黄波戸浦　役座許		横帳	1		26		
37					巳		11	11	午ノ組揚鯨金取建根帳			横帳	1		27		
38									紙数弐枚　丑ノ年捕鯨組揚迄臨時簿			仮綴	1		38		
39									記（金銭覚カ）			仮綴	1		39		

解題　柏谷家文書

史料の概要と特色

現在中央水産研究所図書資料館に収蔵されている「柏谷家文書」は、作成年代が明治 4（1871）年から明治 40（1907）年までの史料で総数は 54 点である。そのうちの少なくとも 40 点は、黄波戸浦（採訪時は大津郡日置村）の鯨組の経営に関する諸帳簿であり、残る史料も 3 点の運上金徴収に関する帳簿を含め、何らかの形で漁業経営に関係する帳簿類である。総じて本史料群は明治期の黄波戸浦における、捕鯨を中心とした漁業経営帳簿によって構成されていると言ってよいだろう。そこで、本節では黄波戸浦の捕鯨業の展開を中心に、その概要と特色について簡単にふれておきたい。

１　黄波戸（きわど）浦と捕鯨

黄波戸浦は山口県の日本海側、深川湾の西側に位置し、対岸には青海島（おうみじま）がある。江戸時代は日置（へき）村に属し、享保 13（1728）年「大津郡日置村石高境目書」（『防長地下上申』）によれば、黄波戸浦の石高は 102 石 9 斗 4 升 3 合、そのうち 74 石 2 斗 4 升を海上石が占め、田畠は合わせても 28 石 5 斗 3 升 1 合にすぎない。幕末に近い天保 13（1842）年作成の『防長風土注進案』でもこの数字にほとんど変化はなく、江戸時代の黄波戸浦は海稼ぎが他の生業を圧倒していたことが分かる。寛保 2（1742）年の「日置村由来」（『防長地下上申』）には、「当浦北之海第一之難所ニて、沖津波すさましく」とあり、生業については「春より夏迄ハ鯖・和布（わかめ）、秋より冬迄ハ長縄猟、其外何ニ不依小猟仕候、尤うわし（いわし）猟も仕候事」と書かれている。「柏谷家文書」の中で最も古い史料である明治 4（1871）年「仕切算用帳」（目録番号１）には鮪・鰤・鯖・鰯の売買を示す記録が見え、恐らく明治初年あたりまでは、黄波戸浦の生業の様子は「日置村由来」に記されている通りだったとみて間違いないだろう。

ところで黄波戸浦の捕鯨は、いつから行われるようになったのだろうか。そもそも北浦と呼ばれる大津郡沿岸の海は、青海島の通（かよい）浦、瀬戸崎浦、深川湾より西の津黄浦、立石浦、川尻浦などの諸浦で江戸時代から網取法と呼ばれる捕鯨が行われてきた。通浦で鯨組が組織されたのは延宝年間といわれ、その他の諸浦でもだいたい 17 世紀中には捕鯨が始っていた。黄波戸浦でも、元禄年間に捕鯨が始められたが、享保元（1716）年から明治 8（1875）年まで休止したことが「大津郡捕鯨沿革及方法」（『山口県勧業年報』明治 20 年）に記されており、先の『防長地下上申』の記述はそれを裏付けている。「柏谷家文書」にも明治 9 年から黄波戸浦鯨方会社の操業が行われていたことを示す帳簿がある（目録番号 4～9）。いずれにしても黄波戸浦で組織的な網取法の捕鯨が始められたのは、明治 9 年前後であったと考えられる。

網取法とは、一般には１７世紀の延宝年間頃から紀州や土佐、九州北部で始まった捕鯨法で、網を張って鯨を追い込み、鯨に網を掛けて銛で突く捕獲法である。

網取法といっても網のみで鯨を捕獲するわけではない。また一部の地域では網のみの鯨漁も行われていることから、それらと区別するためにこれを網掛突取捕鯨法と呼んでいる研究者もいる（中園成生『くじら取りの系譜』長崎新聞社）。また、鯨の回遊ルートに合わせて網を掛ける場所を網代（あじろ）ということから、網代式網取法という名称も用いられている（多田穂波『明治期山口県捕鯨史の研究』マツノ書店）。いずれにしても捕鯨技術の変遷と特徴については、まだ多くの検討が必要であろう。ここでは単に網取法と呼ぶことにしたい。

２　黄波戸浦鯨方会社

明治８年に黄波戸浦は、新規の鯨組の設置を嘆願した。その際の書面に「地下惣代上野作兵衛、岡本甚右衛門」と並んで「浦世話役柏谷太三郎」の名がある（『日置町史』）。柏谷太三郎は「柏谷家文書」の明治９年「諸運上金取縮帳」（目録番号７）の作成者としても見え、恐らく近世期以来の浦の有力者であったと考えられる。黄波戸浦に対する県の捕鯨漁鑑札の下付は明治 13 年２月 17 日であるが、すでに明治９年の日付を持つ「黄波戸浦鯨方会社」の帳簿が存在し（『鯨金取縮帳』目録番号５)、１月 29 日に野曽（のそ）鯨１頭、２月 20 日に座頭鯨１頭の捕獲が記録されている。この背景には、明治８年 12 月のいわゆる「海面官有化宣言」による借区制の導入と、翌９年９月のその後の混乱による取消し、近世以来の旧慣尊重という行政側の混乱もあったに違いない。いずれにしても黄波戸浦鯨方会社の名で、明治９年には捕鯨が開始されていた。この時の捕鯨の規模や方法を伝える史料が残っていないので詳細は不明だが、帳簿の記載内容から見てごく試験的な小規模のものであったと考えられる。しかし次第に体制は整えられたと見え、明治 11 年から 12 年にかけての冬は 12 月に野曽鯨２頭、翌 12 年の１月に野曽鯨１頭、青鷺鯨１頭、座頭鯨２頭、２月に座頭鯨３頭の計９頭が戸崎網代で捕獲されたことを伝えている（目録番号 11,12)。戸崎とは黄波戸の旧称で、天保 13（1842）年の『風土注進案』にも「黄波戸浦ハ元ト戸崎浦と称し候」と記されている。明治 13 年の正月に長曽（ながそ）鯨１頭（目録番号 17)、同年 12 月に長曽（ながそ）鯨１頭、翌 14 年の１月に座頭鯨２頭、２月に長曽鯨１頭（目録番号 15)、さらに同 14 年の 11 月に長曽鯨・野曽鯨それぞれ１頭、翌年の正月に野曽鯨２頭を捕獲した際の代金支払帳簿が残されている（目録番号 18)。ちなみに、以上の捕獲頭数を表にすると右のようになる。なお、北浦の捕鯨期間は、この海域に鯨が南下してくる９月から翌年の４月頃までに合わせ、さらに他の網漁との兼ね合いも勘案して、概ね 10 月～11 月に組立、3～4 月まで操業という周期になっていた。「明治 16 年組建　組建ニ付人数入込控帳」（目録番号 22）によると、黄波戸浦の場合、組立が 11 月７日で翌年４月 13 日まで入込、総日数は 155 日となっている。

明治 11～16 年黄波戸浦鯨捕獲数

期間（11 月～4 月）	捕獲頭数
明治 11～12 年	9 頭
明治 12～13 年	1 頭
明治 13～14 年	4 頭
明治 14～15 年	4 頭
明治 15～16 年	6 頭

上表の鯨の捕獲数は「代金払帳」から算出したもので、必ずしも当期の捕獲数を正確に示しているとは限らない。とはいえ、凡その傾向として捕獲数は伸び悩み、経営は困難だったのではないかと推察される。事実、明治 16 年になると「新網代」が開拓されている。従来の戸崎網代は「本網代」と呼ばれ、二つの網代

での鯨の捕獲が始められた。明治 16 年「鯨売立控帳」（目録番号 23）は、明治 17 年正月から 3 月までに 2 つの網代で、過去 3 年間の 1 年間あたりの頭数よりも多い 6 頭の鯨が捕獲されたことを記録している。

「柏谷家文書」には、明治 18 年以降の鯨の捕獲を示す史料は見当たらない。多田氏によれば、明治 20 年からは瀬戸崎浦外海網代と黄波戸浦の網代は合併し、それを捕獲成績の安定していた川尻浦捕鯨組が一括借用して操業を行うようになったという（多田前掲書）。明治 4 年の廃藩置県以降、北浦のそれぞれの浦が、独立の鯨組を申請した。しかし経営には多額の資金と、独自の技術を持つ一定の人材が必要である。恐らく明治 10 年以前に操業を開始した各浦も、自然条件や技術水準など様々な理由で、ほぼ明治 20 年代には捕獲成績の差が歴然となった。当然その結果として、鯨組の休止や合併などの再編成につながったものと思われる。

明治 20 年以降の黄波戸浦の捕鯨については、「平山家文書」に詳しい（多田前掲書）。この時期に捕獲された鯨は黄波戸浦と瀬戸崎浦の両方に水揚げされており、浦を越えた鯨組の編成が進んでいることを示している。恐らく明治 17 年から 19 年の間に、浦世話役あるいは浦役人柏谷家（目録番号 14）が深く関わり組織された「黄波戸浦鯨方会社」はほぼ解体し、組直しを余儀なくされたものと考えられる。

その後の黄波戸浦捕鯨の展開について、前掲の多田氏の記述にもとづいて簡単に整理しておきたい。恐らく明治 25 年まで、瀬戸崎浦外海網代との合併による操業が続けられたが、26 年以降は再び別々となり、瀬戸崎浦は島根県津和野の堀伴成の出資によって経営されることになった。明治 28 年には、やはり堀氏によって経営されていた立石・津黄と瀬戸崎の各浦鯨組の操業が廃止あるいは休業され、それらの組の器械類や人材を活用する形で、新たに「黄波戸浦捕鯨合資会社」が発足し、社長には出資者の堀伴成が就任した。この段階で、山口県下の鯨組は堀伴成によって経営される通浦・黄波戸浦と、自主経営の川尻浦の 3 つに再編成されたことになる。これらの鯨組も明治 35 年前後には操業を終え、以後山口県下の北浦では、ほぼ網取法による捕鯨は行われなくなった。すでに明治 32 年には、瀬戸崎にいわゆるノルウェー式捕鯨と呼ばれる砲殺捕鯨法を採用した会社が設立され、近世以来続いた各浦漁民による沿岸捕鯨は終わりを告げ、大資本による沖合捕鯨の時代へと転換しはじめていた。

明治 17 年以降の「柏谷家文書」の史料には、大敷網漁に関する帳簿 4 点があり（目録番号 31、33～35）、鰤や鰯の漁獲があったことを伝えている。黄波戸浦は元来、捕鯨以外の網漁や延縄漁あるいは海草の採取など、多様な漁業を生業としてきたことは、寛保 2（1742）年の「日置村由来」（『防長地下上申』）にも明らかである。柏谷家は近世以来の浦世話役として、一時期の捕鯨業を含め、様々な漁業で、主導的な役割を果たしてきたものといえよう。

なお、本稿の執筆にあたって、柏谷家のご子孫にあたる柏谷禎子氏、京子氏に多くのご教示をいただいた。ここに記して謝意を表したい。

（文責　越智信也）